

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究
実施方法等

1. 実践校について

実践校名	(きょうとしりつむらさきのこうとうがっこう) 京都市立紫野高等学校	
学科名	生徒数	学級数
普通科	714 名	18 クラス
アカデミア科	238 名	6 クラス

2. 実践研究の対象

1 年生 322 名 (普通科 : 6 クラス, アカデミア科 2 クラス)

2 年生 317 名 (普通科 : 6 クラス, アカデミア科 2 クラス)

3. 実践研究の実施経過

3 月 企画部において平成 28 年度の成果・課題をもとに 29 年度の年間計画を作成

4 月上旬 企画部と 1 年学年団との年間計画の修正

4 月中旬 総合的な学習の時間 (1 年・2 年) において実践開始

4 月～5 月 「持続可能な社会に向けた開発 (Sustainable Development:SD) 」の概念理解 (1 年)

「総合的な学習の時間」である「むらさきの GAP (Global Action Program) 」のガイダンスとともに、この授業へ主体的に取り組む必要性を説いた。また、SD についての概念を学び、ユネスコスクールとしての自覚を育んだ。

6 月～7 月 私たちの身近な世界から考える SD と論理的な文章の書き方 (1 年)

論理的な文章の書き方を学び、「意見—根拠—事例」を意識させた文章構成を学ばせたうえで、第 9 回で実際に「持続可能な社会を目指して私にできること」をテーマにしてレポートを書いた。

7月～8月 防災・減災授業（2年）

災害時に直面する様々なジレンマを疑似体験し、災害対応を自らの問題として考え、モノとココロの備えをする重要性を知り、当事者意識を涵養した。また、地域の方・保護者・教育委員会・市役所の方々と共に、「避難生活のシミュレーション」を実施することで、「自助」の視点だけでなく「共助」の視点を持って、避難所で率先して判断・行動できる力を育んだ。

9月 京都プランニング（1年）

マレーシア研修に向けて、プランニングを立てる練習をする。京都観光のニーズを理解した上で、京都の観光地を案内することで、自分たちが住む“地域”について理解を深め、京都の魅力を発信する礎を築く。また、グループで意見を出し合い、新たな発見や再認識を通して、他者と意見を調整する力を養う。

10月～12月 マレーシアプランニングと文化比較（1年）

マレーシア研修に向けて、グループでの探究活動に入る。グループ内で興味関心に沿ったテーマを掲げ、そのテーマに応じて日本とマレーシアで比較・考察を行う。

11月5日 日本文化に触れよう～上賀茂神社ワークショップ～（1年）

ユネスコスクールに認定されている京都府下の6高等学校と、東南アジアの留学生約20名、京都外国語大学の大学生など総勢60名近くが上賀茂神社に集まり、ユネスコスクールESD交流会を開催した。本校からは4人の生徒が参加した。

11月 地域フィールドワーク～紫野周辺の残したい景色～（2年）

「持続可能な社会を構築する」という視点から紫野周辺地域をフィールドワークし、次世代に残したい景色をたくさん写真に収める。自分たちの“大切に思っていること”について考察する。

12月28日 神戸フィールドワーク～異文化に触れよう～（1年）

冬休みを1日利用して、1年生全員（普通科239名、アカデミア83名）から有志を募り、異文化理解をテーマに神戸でのフィールドワークを行った。普通科6名、アカデミア科3名の合計9名が参加。

平成30年1月 持続可能な社会に向けて、2050年から現在を考える（2年）

テーマに応じて2050年の姿を想像し、社会に及ぼす影響まで考察することで、持続可能な社会を構築する視点で想像する。

1月 日本文化の探究（1年）

マレーシアと日本の比較・考察についてと、それに伴う現地フィールドワークのプランニングを中間発表したことで、多面的な視点を獲得して、自分たちの探究を見直すきっかけをつくり、再探究に生かした。

1月～2月 ポスター発表・レポート提出に向けて（1年）

ここまでのグループ活動をポスターとレポートにまとめる。Wordで作成したレポートを提出し、ポスターは、体育館にて発表会で使用する。

2月 GAPIS (Global Action Program Interactive Session)（全学年）

2年生普通科スタンダード (GAP2nd) で作成したポスター発表を全員が行う。1年生と他クラスの2年生が聞き手となり、ポスター発表をし、表現力を養うとともに、聞き手としての姿勢も涵養する。

平成29年4月～30年3月 総合的な学習の時間プロジェクトチームによる平成30年度以降の総合的な学習の時間の再編

4. 実践研究の実施体制

京都市立紫野高等学校

└担当教頭

└企画部13名

└研究担当（研究主任1名＋研究担当3名）→総合的な学習の時間内容作成・管理

└1年学年主任

└1年担任団 総合的な学習の時間（むらさきのGAP） 授業担当者 8名

└2年 総合的な学習の時間（文化と人間）授業担当者 2名

└2年 総合的な学習の時間（むらさきのGAP2nd） 授業担当者 7名

└総合的な学習の時間プロジェクトチーム 9名→平成30年度以降の授業再編

紫野高校周辺

└保護者

└地域住民

└京都市教育委員会・市役所

5. 教育委員会等として取り組んだ内容

※ 実践研究の充実や成果の普及の観点から、教育委員会等において取り組んだ内容を具体的に記載する。

教育委員会では、平成28年度から新規事業として全市立小・中・高等学校を対象に「政治的教養を育む教育学習指導案集を活用した教育実践事業」を立ち上げた。本市独自の「政治的教養を育む教育学習指導案集」の活用を通じ、小学校段階から政治や選挙への関心を高め、中学校、高等学校と発達段階に応じた体系的な取組を推進することで、主体的な選択・判断を行い、他者と協働して様々な課題を解決していく社会の形成者としての資質や能力の育成を目指している。

高校では、地域や社会の課題等に気付き、その解決策を地域の方等とも連携し、様々な条件等をもとに考察・検証し、話し合いや討論を経て結論を引き出す地域連携・貢献事業や社会課題解決事業を通して本事業の目的達成を目指している。

本研究における実践校の研究成果を、地歴公民科担当の指導主事を中心に社会科研究会や教員研修等における実践発表等を通して全市立学校へ普及させており、各校の特色や地域性に応じたプログラムを確立するための支援を行った。

また、本研究においては、実践校は総合的な学習の時間において研究を進めているため、新学習指導要領も見据え、総合的な学習の時間におけるねらいや生徒につけさせる能力や指導方法、学校体制に対し指導主事を中心に指導助言を行い、本プログラムの充実及び総合的な学習の時間の構築の支援を行った。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

実践校名：京都市立紫野高等学校（全学科）**概要**

- 異文化理解や地域での活動を通じて、国際人としての資質を育む学習プログラムを開発する。

1年生の「総合的な学習の時間（むらさきのGAP）」において取り組む。持続可能な社会の構築の概念のもと、自身の興味関心から日本（自分が住むフィールド）と異文化（普通科：マレーシア，アカデミア科：オーストラリア）を比較・分析し、現地でのフィールドワークやホームステイ・大学訪問などを実際に体験し、比較・分析した内容を確認することで、多様性を認め、多面的な視点で物事を捉える力を培い、自身が地域・国・地球の構成員であることを自覚する。

2年生では、1年生で培った地域・国・地球の構成員であるという空間的な考え方に、時間軸を加え、2050年を想像し、そこから現代社会に提言をすることで、持続可能な社会を構築するための資質を養う。

学習プログラムの目標

- 社会において、他者の考えを尊重し、理解したうえで、自らの考えを表現する力や、他者との関わりの中で異なる意見を調整し協働する力を養うことで、主権者としての資質を育成する。
- 「グローバル」や「ボーダーレス」化が進む社会の中で、自らの住む地域の理解や関心を深めるとともに他国の現状を知り、思索を深めることで、国際社会に主体的に生きる社会の形成者として必要な自覚と資質を養う。
- 自分の住む地域の現状を知り、より良い将来像を考察し、その実現に向けた行動をとおして、主権者としての資質を育み、自立した生徒を育成する。
- 海外研修でのフィールドワークの事前・事後のプログラムを通じ、他国の現状を知るとともに、日本や京都の魅力に気づき、その将来を担う一員として持続可能な社会に向けた政策提言をすることで、多角的な視点から国際貢献を捉える姿勢を育成する。

学習プログラムの主な内容

【1年】

- ① 「持続可能な社会に向けた開発」の概念理解（1年）
…ユネスコスクールが掲げる「持続可能な開発（SD）」についての概念を感覚的に理解し、むらさきのGAPで学ぶ事柄のイメージを共有する。
- ② 私たちの身近な世界から考えるSDと論理的な文章の書き方（1年）
…SDについて、実際の出来事を新聞記事などから取り上げ、具体性を持たせる。
また、論理的な文章の書き方を学び、「持続可能な社会に向けて私にできること」というテーマで小論文を書く。
- ③ 京都プランニング（1年）
…各班に、異なる京都観光のニーズが記載された指令書が渡され、そのニーズに応える京都観光プランを立てる。マレーシア研修旅行のプランニングの練習として行った。
- ④ マレーシアプランニングと文化比較（1年）
…日本とマレーシアの文化を比較・分析するため、またマレーシア研修を意義深いものにするために、各グループの興味関心からテーマを設定し、調べ学習を通して学びを深める。
- ⑤ 日本文化に触れよう（1年）
…ユネスコスクールに認定されている京都府下の6高等学校と、東南アジアの留学生約20名、京都外国語大学の大学生など総勢60名近くが上賀茂神社に集まり、ユネスコスクールESD交流会を開催し、本校からは4人の生徒が参加した。
- ⑥ 異文化に触れよう（1年）
…冬休みを1日利用して、異文化理解をテーマに神戸でのフィールドワークを行った。1年生の有志普通科6名とアカデミア科3名の9名が参加し、南京町の中華街・神戸モスク・北野異人館に赴き、現地を散策した。
- ⑦ 日本文化の探究（1年）
…マレーシア研修のプランニングをクラス内で共有することで、多面的な視点を獲得し、自らのプランニングを客観視した上で、探究を深める。
- ⑧ ポスター発表・レポート提出に向けて（1年）
…グループでの協働をレポートとポスターにまとめる。まとめることによってマレーシア研修でのグループごとの課題が設定され、現地ですべきことが明確化される。

【2年】

- ① 防災・減災授業（2年）
…地震などの災害に対して当事者意識を持たせ、「自助」を養うとともに、校内の避難訓練MAPの見直しや、地域の人たちとの避難所シミュレーションを通して「共助」の視点も身につける
- ② 紫野周辺の残したい景色（2年）
…グループで紫野高校周辺をフィールドワークする。「持続可能な社会を構築する」

という視点から地域をフィールドワークし、次世代に残したい景色をたくさん写真に収め、自分たちが「大切にしているもの・こと」を探る。

③ 持続可能な社会に向けて、2050年から現在を考える（2年）

…「2050年の私から、現在に提言をしよう」というテーマで探究活動を行った。

SDの視点で2050年を想像し、想像した未来から現在に提言をすることで、課題が明確化され、次世代の持続可能性の意識を涵養した。

【全学年】

① GAPIS (Global Action Program Interactive Session) (全学年)

…2年生普通科スタンダードで作成したポスター発表を全員が行う。

学校行事として発表会をすることで、表現力を養うとともに、聞き手としての姿勢も涵養する。

学習プログラムの成果の概要

○「持続可能な社会の構築（SD）」について理解を深め、その担い手としての意識が高まり、異文化を尊重するとともに、自文化への関心を持った。

→例えば、マレーシアの食について調べている中で、ワサビが日本特有の食材であることを知ったグループがあった。異文化を理解することで、当たり前にあった自文化が実は普通ではないことに気づき、調味料などに探究心を向け、課題を設定してマレーシアで確認をした。

○地域や世界の構成員として主権者の自覚が芽生え、社会貢献の考えが確立できた上で、過去から未来といった時間軸の視点を持って「持続可能な社会の構築」を目指す意識を持った。

→地域の人たちとの取り組みを通し、生徒から「年齢の上下関係なく議論することで、大人の持っている知識や経験にハッとさせられた。」という地域交流の重要性を再認識するような感想が多く出た。

○自らの考えを表現し、他者の意見も尊重、理解する中で、多角的な視点を獲得しながら合意形成をはかる「協働」の重要性を理解し、発信することでプレゼンテーションスキルを培った。

→グループ内やクラス内、学年など多くの発表機会を設けたことで、発表スキルを身に付けたと感想に書いている生徒もいた。また、総合的な学習の時間のアンケートでも、学校行事やグループ活動に主体的に取り組むようになったと答える生徒が非常に多かった。